
ネギま！に入った人・改

鋤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！に入った人・改

【Nコード】

N6307X

【作者名】

鏝

【あらすじ】

今までのネギま！に入った人。とはまったく関係ありません。すいません。
いわゆるテンプレ作品です。
暖かく見守ってください。

序章 新生 壱（前書き）

どうも。

文体といっしょに設定まで捨て去りました。

感想が書かれると更新のペースが上がります。

序章 新生 壱

目が覚めると、そこは『場所』だった。

特徴はなく、曖昧。

色はあるようにも、ないようにも見える。

無限に広がるようにも、かなり窮屈なようにも思える。

「おいおい…こりゃまた不思議な場所に来たなア…」

何だかんだ言ってパニックにはならない自分に嫌気が差す。

勿論大分取り乱してはいるのだが。

【ニンゲン。お主、随分と落ち着いておるのだな。】

そこで、どこからともなく声が響く。

………
これはヤバイ。

俺の本能が告げる。

コイツは、強い。

俺なんかじゃあ近寄ることも出来ないくらいに。

…とは言っても、俺は戦うことなんざ出来やしないのだが。

俺にあるのは『本能』だけ。行き過ぎた危機察知能力だ。

【ニンゲン。お主、面白いな。】

考え込む俺を無視して、独り言のように言葉を続ける『声』。

【ふむ…少々予定を変えるのも一興、か。】

何を言っている？

予定？

というかここはどこだ？

「おい、アンタ。」

【なんだニンゲン。】

ふむ、アンタ、と呼んだ程度じゃあ怒らない、か。

傲慢、ではないな。

「ここは、どこだ？」

【ふむ…そういえば何も伝えておらんな。お主がかなり面白いニンゲンだったのだな。失念しておった。】

すまん、と続け、『声』は声の調子を変えた。

【此処は『地獄の門』。所謂、死者を裁く場だ。】

聴いた者に畏敬を抱かせる、声。

背筋が震えた。

……つまり、俺は死んだわけか。

いつか死ぬとは思っていたが…まさかここまで早いとはな。

「それで、あんたは閻魔サマか？」

俺の返答に、『声』改め閻魔サマは【ほう…】と驚いたように声を出した。

【ここまで死の受け入れが早いとはな…益々面白い。それから言うておくが、我は閻魔ではない。】

閻魔じゃなかった。

『声』改め閻魔サマ…でもなくやっぱり『声』は続ける。
あ、混乱してきた。

【そうだな…『おおかみ大神』とでも呼ぶがよい。】

む？

『おおかみ大神じゃあないのか？』

【うむ。そうだ。】

なにかこだわりでもあるのか訊きたくなったが、このままではいつまで経っても話が進まん。

「まあ、いい。死ぬのは怖くはなかったからな。嫌だったけれど。俺は地獄か？」

俺の持論を語れば、声はほんの少し声を高くし、またしても【ほう。】と言った。

口癖？

【面白い。つくづく面白いぞニンゲン。やはりこのまま送るのは詰まらん。】

「お、おい。なんの話をしているんだ。」

さっぱり話が掴めない。

俺は詳しい説明を大神に求めた。

【なに。お主に2度目の生を与えてやろうというだけだ。】

……………はい？

「2度目の、生…？」

願ってもないことではあるが…

大神の目的は一体なんだ？

俺のような平凡な人間を転生、というのか、させて。

嫌な仕事は請けるつもりはない。

【然り。2度目の生だ。理由が気になるのなら教えてやろう。お主のような面白いニンゲンが、死の近い世界でどれだけ面白い生を謳歌するか、気になったのでな。】

「要するに、アンタが俺の生活を見て楽しむことが目的だと考えていいのか？」

然り、と大神は再び繰り返した。

……その程度なら、生きる代償としては小さ過ぎるくらいか。

【部下に任せればたいていのことは片付くのでな。娯楽のようなものだ。】

アンタ部下とかいたんだ…

なんか意外だわ。

「…まあ、それでいい。だけど、死に近い、っていうんじゃあすぐに死ぬぞ？」

さつきから気になっていたことを告げると、大神は【それならば問題ない】と答えた。

多分顔はどや顔だろう。

【お主を『書き換える』。それに我もついて行く。】

書き換える、というのに若干の不安を覚えたが、さらに問題なのは後半部分だ。

「アンタ、偉いんだろう？そんなんが一緒に下界に降りて大丈夫なのか？」

【大丈夫だ、問題ない。】

……………イーノック！！

毒電波を受信したところで、質問を続ける。

「だったら、アンタ一人で面白くすればいいじゃないか。」

【我はお主に危険が迫らない限りは手を出さん。それに、我の力は向こうでは制限されるのでな。】

「……………はあ。分かった。好きにしてくれ。」

【了解した。すぐに姿を見せよう。】

声がして30秒程後だろうか、瞬きをすると、目の前には銀色の毛並みの俺より大きな狼がいた。

漸くさつき大神おおみかみじゃなくて大神おおみかみだって言った理由が分かった。

「洒落を言うとは、随分と俗物的なんだな。」

恐怖と畏敬と驚愕に震える体を抑えながら強がると、目の前の大神は凶暴そうに口の端を上げた。

【この状況でそれだけ言えるとは…私の眼は間違っていないかったよ
うだな。】

と、そこまで聞いたところで、そういえば、と思い出したことを聞
く。

「死が近い世界、って言うには今までとは全く別の世界に行くのか
？」

【然り。どのような世界に行くかは我にも分からないようになって
いる。】

その方が面白からう？と続けて、大神は俺に近づいてきた。
自然と背筋が伸びる。

そのまま大神は俺の腕に触れ――

序章 新生 壱（後書き）

とりあえずここまで。

能力も全然違うモノですんで・・・

今までのが好きだった方はもうやめた方がいいかもです。

序章 新生 弐（前書き）

感想に感動して予定よりはやく投稿しました。
なおぼんさん、ありがとうございます。

序章 新生 弐

「あれ？」

——目が覚めると、そこは山道だった。

大神も、『場所』もない。

周囲を見渡せば、遠くに武家屋敷風の建物が見える。

「——もう飛んだ、と考えていいのか？」

【然り。】

「ぬわおう！」

『場所』に来たときよりも驚いた。
どこからともなく声が聞こえる。

いや。

「俺の…中？」

【然り。我はお主を憑代としてこの世界に在る。】

…つまり、俺は神憑きって奴か。

【ふむ。取り敢えずはお主、自分自身について調べた方がよいぞ。】

俺、自身？

不意に、少し目線が低い、と思った。

自分の身体を見下ろして見ると、麻のぼろ布一枚を体に巻いただけの、可愛らしい手が見えた。

「はい…？」

いや、まさか。

幼児化、している。

【くくく…ははははは！！】

そこまで把握した所で、脳内に大神の笑い声が響く。

「笑うなよ！」

思わず怒鳴ってから、ふと思ったことがあった。

「アンタの声、周りにも聞こえるのか？」

【くくく…聞こえぬ。…くっ】

未だに笑う大神。お前こんなだったか？

「じゃあどうするんだよ。周りから見たらただのかわいそうな人じゃあねえか。」

【心で言葉を思い浮かべれば、必然的に伝わる。】

心で、言葉を、ねえ。

『こっか？』

【然り。因みに言えば、現在のお主だが、】

『うん？そういえば俺を書き換える、って言っていたな。幼児化がそれじゃあないのか？』

【鬼だ。】

は？

何を言っている？

鬼？

俺が？

いや別に角なんか生えて――

「あ……」

——いた。

額に手を当てれば、中央から伸びた角に引っかかった。

長さは凡そ10cmほどだろうか。すべすべとした角だ。先端をつくと痛かった。当たり前か。

【鬼とは言っても、ただの鬼などではない。吸血鬼とも渡り合える程の力を持つ鬼、あおおに蒼鬼だ。まだ子鬼だな。】

ちなみに角は隠すことが出来るぞ、と付け加えると、大神は黙った。

俺は、消える！と念じてみた。

15秒程だろうか、額が少し痛くなり、頭が若干軽くなる。

手を当ててみれば、そこには普通の額が。

『最初から消しておいてくれればよかったんだが。』

【それでは信じぬだろう。…まあ、お主なら分らんがな。それから、強く、とずっと念じれば角が出てくる。次からは両肘からも出るから気を付けることだ。】

なんだか口調が崩れてきている気がするが、それは気にしない。

とりあえずは今の自分の容姿の確認のため、水の音がする方へ向かい、歩き出した。

川に着くと、まずは自分の容姿を確認。

生前——今生きているのにこう言つのは変だが——の俺の子供の頃だ。

肉体年齢は10歳位か。

『しかし、なんで幼くしたんだ？』

【お主の修行期間、という奴だ。肉体の黄金期には強くあって貰わなくてはな。】

俺の疑問に、大神は即答した。
取り敢えず、角を出してみる。

視界が鮮やかになった。青系統の色はよりくつきりし、赤系統の色は少しぼやけて見える。

背中が突っ張る感じもする。

それから再び水面を覗き込むと、額から蒼く輝く角が生えた俺がいた。

そして何故か瞳も蒼い。

中に見える瞳孔は紅く、正三角形を描く。髪は普通の黒髪だが。

『こいつは魔眼の類か？』

もう何があっても驚くまい、と心構えをして大神に質問する。

大神は一瞬考えると、口を開いた（見えないけど）。

【少し違う。魔眼、というよりは書き換えの副作用のようなものだ。予想以上に蒼鬼との相性がよかったようだな。】

大した眼じゃあなかったことに驚きた。
畜生。裏の裏をかれた。

そういえば、さっき肘からも角が出るって言っていたな。
ふと思い出して確認すると、両肘から蒼く輝く長い角が。
というか。

手首から肘にかけての外側までもがそういう材質になっていた。

要するに、手首から肘の先までが蒼い刃になった。

気分はナ○ガク○ガである。

なんとなく、近くの木に飛びかかってみた。

スパッ……

美しすぎる切断面だった。

「おいおい……洒落にならんぞ。」

ここがどんな世界かは分からないが、もう少しこう……致命傷になり
にくい攻撃はないのだろうか。

【ないな。】

聞いてみると、あっさりと返答された。

……殺さないように戦うには角は出せない、か。
まあ殴ればいいのだが、一歩間違えれば相手が死にかねない。

【取り敢えずは角をしまえ。何者かが近づいている。】

ちよ、それヤバイじゃん！

ということで、慌てて出たままの角をしまった。

早くも慣れたのか、そこまで手間取ることはない。

着ている…というか巻いている麻布を少しだけ強く体へ巻きつけると、俺は警戒しつつ振り向き、周囲を見渡した。

『おい、何もいないぞ。』

何も見えない。

しかし、大神からは警戒を続けるように言われたただだった。
「ッ！！」

ふと、俺の危機察知能力に何かが引っかけた。

慌ててその場を飛び退く。

カ力カ力ッ！！！！

今まで俺の居た場所に、手裏剣が突き刺さった。

……手裏剣！？

「ほう…童^{わっほ}にしては大したものだな。刺客か？」

驚くうちに、いつのまにか目の前には忍者がいた。

いや、だってさ。服装がいかにもな忍者なんだもん。

「童、お前は敵か？」

単刀直入に聞いてくる忍者さん。

俺は自分の身なりを一瞬見下ろしてから、忍者さんの眼を見ながら返答した。

「違う。」

俺の一言に、予想通りだともいいたげに笑った忍者さんは、

「童、帰る場所はあるか？」

と聞いてきた。

俺は素直に首を横へ振る。

すると、忍者さんはニヤリと笑って言った。

「童。里へ来い。」

……マジで？

「いや、保護？してくれるのは有り難いんだが…そんな無条件に信じていいのか？」

「これでも人の上に立つ者だ。童の嘘程度なら見抜けるわ。」

がはは、と忍者さんは豪快に笑う。

じゃあ、まあ。

「・・・世話になるな。」

「なに、気にするな。」

やってきたのはさつき遠くに見えた武家屋敷。

中に入ると、地下へ繋がっていた。

「さて。お前、名は？」

忍者さんが聞いてきた。

「名は……」

何だっけ？

死んだショックでなのか、覚えていない。

【鬼原禪だ。確か、な。】
きはらぜん

「鬼原禪。」

久し振りに喋った大神の言葉を復唱する。

確か、っていうのは気にしない。

「よし、禪。お前は今日から伊賀の里の忍だ。」

「お、おい。あんたの一存で決めていいのか？」

とんとん拍子に進む話に戸惑いつつ、質問する。

忍者さんは、それなら大丈夫だ、と胸を張った。

「それでも里の頭なんでね、多少の融通は聞く訳よ。まあ、誰も反対しないだろうが。何せ里長直々に連れてきた童だ。みんながみんな、お前に興味をもつだろうよ。もっとも、期待するかどうかは別だが。」

こっちとしても期待なんざしない、とでもいうようにがはがはと笑ってから——忍者がそんなにうるさくていいのか——地上へ出た。

「さて、再び。

鬼原禪。

伊賀の里へ、ようこそ。」

こうして俺は、忍者になった。

後日談というか、今回のオチ。

なんて阿良々木さんを気取ってみても、所詮俺なんぞに似合うわけもなく。

翌日聞いた話によると。

昨日の忍者さんは第23代里長だとか。

俺はこれから里での忍術修行をすることになった。
1年もあれば、任務に出られるようになるらしい。

次に、大神に関して。

天照ではないそうな。

なんかよくわからないのだけれど、結構偉い神様だとかなんだとか、
自慢気に話していたことが印象的ではあった。

天照といい仲になったこともあるのかないとか。

三つ目、忍者の里に関して。

現在日本——そこまで文化体系の違う世界ではないことに安堵した——には二つ、甲賀と伊賀の大きな里があり、それぞれの下に小さな里がいくつかが付いているらしい。

甲賀と伊賀は商売敵であるために、互いの忍びが出会えば喧嘩や小競り合いは必須だとか。

殺し合い、なんてのもごく稀にあるそうだ。

最後に、鬼の能力^{ちから}について。

取り敢えず大神との相談（脳内）で当面は隠すことにし、隠れて力を使いこなす修行も行っこととした。

目標は一人前の忍。

あとはここがどんな世界か見極めること。

俺たちの人生は、まだ始まったばかりだ！

（注）まだ続きます。

序章 新生 貳（後書き）

次回予告

忍の里へやってきた鬼原。

その耳に、突如聞こえてくる声。

「木イイイイイ原くウウウウウウウん！！！！」

なぞの声の正体とは！？

そして字が違う本当の理由とは！？

一方で、大神は天照にこつてり絞られていた！

彼女は嫉妬しているのか！？

そして大神の顔面に突如現れたニキビの理由とは！？

次回「鬼と忍（大嘘）」

あ、でももしかしたら題名はこれにするかも。

（改）10/27 長の一人称をなくしました。リアル友人から、
「これは男の一人称だぞ？」っていわれたので。

序章 転機 追放（前書き）

禪「なあ、このコーナーなんか意味あるのか？」

大【我が知るか。】

鏝「あるんだよ！うん！質問コーナー！皆さんからの質問に答えます！」

禪「なになに？まずは『迅竜』さんから。【名前だけ出ても嬉しくないです。本編に出してよ！】。さて、どうする作者？」

鏝「ちょ、作者じゃなくて鏝だから！作者ってまとめな

大【お主の出番などないわ。モン。ンで殺されている。】

鏝「台詞を途中で切るなんて・・・私もう

禪「じゃあ、今回も楽しんでってください！」

序章 転機 追放

今回はまず最初に、俺の主な修行を説明しよう。

一つ目、基礎体力。

ランニングをしたり、筋トレをしたり。

ただし。

ランニングはダッシュで50kmとか、筋トレは岩やらなんやらを持ち上げたり。

何回吐いたかわからないくらいだ。

【それでも里長に弱音を吐かなかったのはお主がマゾだからかもしれないな。】

うつせえ。

あ…そういえば。

今日で里に来て丁度八年になる。現在2002年。

五年前から任務を請けられるようになり、今では上忍にまで上り詰めた。

最年少の上忍だとか。

そうそう、任務中麻帆良と言うところに行つて、ここがネギま！世界だということが分かった。

原作知識はもうほぼ忘れていたから、分かってもあまり意味はない

がな。

さて、話を戻そう。

忍術修行は体術を主に行い、分身や縮地もその一環として学んだ。

基礎体力さえつければ、こちらは比較的簡単に終わった。

そして現在。

俺は里から離れた場所で鬼の力を使いこなす修行を行っていた。

どんなことをしているかと聞かれれば、瞑想である。

座禅を組み、角の力を適度に増幅させ、腕のブレードの切れ味を上げたり下げたり。

瞑想中は索敵が出来ないが、大神がいるためにその心配もない。

今も大神は黙っている為、問題はないのだろ「がさがさっ！」……む？

音のした方を見れば、里の上忍。

驚愕に目を丸くしている。

『お、おいおいおい！大神！見られちゃったぞ！』

【む……？……ああ、すまん、寝ておったわ……ふぁ……】

うおおおおおい！

俺は思わず叫びそうになったのを口に手を当てることで抑え、上忍のいた場所を見る。

……いない。

こりゃ…里長に報告に行ったか。

俺は大きく息を吐き出すと、出したままだった角をしまい、里長の元へと向かった。

襖の前で一度声をかけ、中からの許可をもらって襖を開ける。

既に幹部は集まっていた。

俺は下座に正座して里長からの言葉を待った。

「禪。お前が人外であるというのは真実か。」

「はい。」

俺の返答に、幹部が一斉にざわめく。

しかし、驚きはあっても、悪意はなかった。

全員が俺を目にかけてくれた人達だ。

「証拠を見せてくれ。」

周囲を見渡し、全員が落ち着いたのを確認してから、俺は角を出した。

全員が一様に驚愕の色を見せる。

長が一番に再起動し、俺の方を向く。

「掟より、忍の里に異形の者は入れん。よって、お前をこの伊賀の里から追放する。」

長の言葉は予想通りとはいえ、やはり胸にぽっかりと穴のあいたような虚しさを感じる。

しかたのないことだ。

そう自分に言い聞かせ、俺は立ち上がろうとした。

「まあ待て。」

「はい？」

里長から声が掛かり、そちらを見ると、長は悪戯気な笑みを浮かべてこちらを見ていた。

周囲の幹部も似たような表情をしている。切り替え早いなお前ら。

俺が混乱して黙っていると、長は言葉を続けた。

「ここからは極秘の話だ。誰にも言うな。」

俺は全く話が読めなかったが、取り敢えず頷いた。

「お前はこれからある土地へ行くことになる。

そこは麻帆良と行ってな。

そこでのことをお前は日記にするわけだ。

そしてお前はその日記を持って偶然このあたりを通りかかり、里の忍に捕まってしまうい、日記を奪われてしまうのだよ。」

その言葉を聞き、俺は漸く話が読めた。

つまり、俺は麻帆良への潜入任務をするわけだ。

恐らく、俺も周りと同じような笑みが浮かべているだろう。

「では、掟に従い、この里を追放されることとします。」

俺は一礼すると部屋を出た。

【全く、奴らも人が悪い。】

『ははは、全くだな。』

俺は一人口の端を吊り上げると、家へと向かった。

恐らく、偽造の教員免許くらいは準備されているだろう。

家に帰ってから、任務書類を確認する。

「鬼原禪：任務書類

潜入任務：麻帆良

調査対象：関東魔法協会及びその会長の孫（関西魔術協会の長の娘でもある。）

調査案件：最近の動向

孫に関して：護衛

依頼主：関西魔法協会

鬼原禪の役割：魔法教師」

恐らく、西の長が娘の護衛、その他幹部が動向の調査を依頼したんだろう。

だが。

俺は魔法など使えない。

意味が分からず長の所へ戻ろうとしたところで、2枚目に気づいた。

「備考：忍術に使う『気』も魔力と似たエネルギーであるため、魔

法を学ぶ必要なし。ただしベクトルが違ったため、警戒を怠るべからず。」

そういうことか。

備考は最後に、こう書いてあった。

「忍の内でも、魔法の存在をしるものは少数。極秘とする。よってこの書類は読後、燃やすように。」

俺は書類を燃やしてから荷物を纏めて部屋を出た。

「すつ、ゲーなあ…。」

【おい、鬼原禪よ。声に出ているぞ。】

『…いいんだよあれくらい。』

俺は今、麻帆良に来ている。

ここ広すぎ。

学園都市…さすがだな。

ちなみに言えば、大神の俺の呼び方は『ニンゲン』『お主』から『鬼原禪』『お主』に変わった。

『お主』は変わっていないけれど。

さて、待ち合わせ場所は、っと。

俺が渡された地図を見ながら歩いていると、誰かの肩が俺の肩に当たった。

俺は鍛えているためになんともなかったが、相手は「きゃっ」となるとも可愛らしい悲鳴を上げて尻餅をつきそうになった。

俺は慌てて手を伸ばし、その人の手を掴み、こちらへ引き寄せる。なんとか転ばずにすんだものの、俺が抱きかかえるような状態になってしまった。

「あ、すいません。」

俺は気恥ずかしさを押し隠して相手を見る。

綺麗な黒髪をした、どこか抜けたような印象を受ける美少女だった。

「あ、こちらこそ」

ぼわぼわした喋り方でぺこりと頭を下げると、とことこと歩いて行ってしまった。

【随分可愛らしい女子おなこだったな？】

いつもより少し低い声で言う大神。何かあったのか？

『ん？ああ、まあ、そうだな。だけどよ、あれ護衛対象だぜ？』

記憶と照らし合わせ、本人であることを確認ながら、俺は大神に返答した。

そのまま待ち合わせ場所…というか、俺が直接学園長室へ行くらしい。

学園長室を目指して女子校エリアを歩く。周囲からの視線に緊張している、前方から先程ぶつかった女の子と同じ制服を着た長身の少女が歩いてきた。褐色肌の美少女である。

どこかで見たような気もする子だな、と思いつつすれ違おうとした

「ッ!？」

——のだが、彼女は立ち止まり、此方を睨みつけてきた。
しかも身構えている。

——戦闘用に鍛えた体、か？

俺はチラリと観察しつつ、大神に相談することにした。

『おい、なんかこっち見てるぞ。』

【ふん。気にすることもあるまい。あちらが仕掛けてくれば迎撃すればいいだろう。】

大神からの返答は相変わらず低い声で、しかも素っ気なかった。
何かあったのか？

俺は首を傾げつつそのままのペースを崩さずに女の子の横を通り抜けた。

しばらくちくちくとした視線が感じられたが、暫くするとその視線も外れた。

「ここか…」

俺は大きな扉の前に立っていた。

言わずもがな、学園長室である。

俺はボロが出ないように自分に言い聞かせてから、扉を叩いた。

「今日から此方で働かせていただきます、鬼原です。」

「…入ってくれい」

数瞬の間、中から声が届く。

俺は若干の緊張を覚えながら扉を開き、中に入った。

中にいたのは2人。

煙草の匂いをするダンディな青年と、Mr・後頭部。

いくら昔写真で見たことがあってもその後頭部を二度見してしまった俺に罪はない。

「さて、俺がこの学園の長、近衛近右衛門じゃ。よろしく頼む。」

「俺は鬼原禪。宜しくお願ひします。」

お互いに挨拶をすませてから——横のダンディな青年とも——
学園長は俺の此処での詳しい仕事の説明を始めた。

内容を簡単にすれば。

・夜間の警備を行い、侵入者は出来る限り生け捕りにして学園長へ
引き渡すこと。活躍に応じてボーナスあり。

・警備後にはその日の様子を報告すること。

・孫（名は木乃香）の護衛も行い、有事の際には木乃香の安全を最
優先にすること。

・護衛はもう一人いて、俺はあくまでそちらの補助としてつくとい
うこと。

・特に授業は受け持たなくていいが、木乃香のいるクラスの副担任
をすること。

大体こんなところだ。

「あの、俺が寝泊まりするところは？」

「あ……」

俺が聞くと、学園長は「しまった」という顔をした。

忘れていたらしい。

隣のタカミチさんも、学園長が忘れていたことに対して呆れている。

「はあ…じゃあしばらくは野宿でもしますよ。」

「すまないのお…」

俺は失礼します、と言ってから部屋を出た。

『ああは言ったものの…どうする?』

【ふむ…野宿自体は慣れているだろう。その辺りの山で構わないのではないか?】

まあ、それはそうなのだが。

…いや、それで大丈夫か。

俺はぶるぶると頭を振ると、森を探して歩き出した。

こうして、山の中で野宿することになった俺。

取り敢えずの拠点を作り、明日から山菜の採集やら釣りやらなんやらすることにした。

拠点は普通のテント。

寝泊まりできればいいだけだからな。

一応、護衛対象にはすぐに駆けつけられる位置である。

「麻帆良に関する報告書

記録者：鬼原禪

潜入初日。麻帆良での仕事の詳細を確認、及び拠点の作成。

長のミスにより、暫くの間野宿。しかし記録者は、長には何か狙いがあつて野宿させたのではないかと推察。当面は千里眼に気を付けつつ護衛対象から離れすぎないようにする。

明日、もう一人の護衛と接触する予定である。」

序章 転機 追放（後書き）

次回予告

やってきた右側通行（誤字にあらず）の怒りは人違いだったかと思
い、説明しようとする禪。

だが、右側通行（誤字にあらず）は怒りを納めない。

禪その圧倒的な能力を前に、禪がとった行動とは・・・！

一方で、大神は未だにネットゲームに熱中していた。

ついに明かされる天照の正体に、大神は・・・！！！！

次回「知らない、変貌（大嘘）」

あ、そうそう、IFとかでなんかクロスさせたいんですけど・・・
どういふのがいいか募集します。

締め切りはまあ・・・一定量の票が集まるまで、ですね。

11/14（月）次回予告の内容変更しました。

図書館島編 邂逅 壱（前書き）

鬼「作者がだらしないので読者から質問が来ない質問コーナー！」

鏝「うるさい！私に文才を期待しないで！」

大【今回の質問はなんだ？】

鏝「はいはい、えーっと・・・『ほぼ育ての親』さんから。『出番が少ない、というか性別すら明かされていないのだが。』あー、これは完全に私が悪いわ。」

鬼「バカだな。長は女だぞ。」

大【ちょうどお主の好みぴったりの、な。】

鬼「う、うるせー。というか大神なんで若干機嫌悪いんだよ？」

大【何でもない。】

鏝「禪も鈍感だよねー。まあ今はまだしょうがないかもしれないけど。この質問に乗じてカミングアウトしちゃえb

大【うるさいわ！】

鬼「？よくわからんが・・・まあ、今回も楽しんでいてください。」

限りなく零点に近い正解だ。

がさがさ、という音と、何かが呼吸するような音が聞こえた。

俺はぱちりと目を開けると、音のした方向を見る。

「……熊？」

安眠妨害な獣だった。

「はあ… やっぱりよ、朝っていうのは自分から起きてなんぼなんだぜ？」

テントの中を見渡す。

幸い、大した傷はなかった。

俺は寝袋に詰まったまま、熊に軽い殺気を叩きつける。

「ぐるう！？」

思いのほか可愛い声を立て、熊は飛び上がった。

そのまま慌てて踵を返すと、どたどたと逃げ去っていった。

『なあ大神』

【…何だ？】

若干欠伸混じりの声で大神は言う。

『今何時だ？』

【我が知るか。】

ぱっさり切られた。

俺は寝袋から出ずに時計を探る。

「……たしか、この辺に、っと」

発見した。

針を確認すると、まだ6：00だ。

俺はごそごそと寝袋を出て、大きく伸びをする。

確か、今日からもう新任の教師が来るんだったな。

あとは…もう1人の護衛と顔を合わせておくか。

今日の予定を頭の中で反芻しながら、俺は簡単な着替えを済ませ、顔を洗った。

まだあと一時間以上余裕があるので、角の制御の修行でもするか。

『索敵は頼んだぞ。』

【…ああ。任せろ。】

角を出してから座禅を組み、心を落ち着け、大きく息を吸って――

「…あ？」

――異変に気付いた。

肩が硬質化している。

鱗………というか、ざらざらした結晶のような状態だ。

角とブレードも同じような材質になっている。

爪の先でこすつてみると、ペリペリと剥がれる。

『お、おいおいおい！何か変な感じになってるぞ？』

【…恐らく、急な環境の変化が理由ではないか？】

『いや、ないだろ。』

一瞬黙った後の大神の答えに、俺は言葉を被せた。
今まで任務で野宿くらい幾度となくあったぞ？

麻帆良の空気とかでもないだろうし……

『お前、何か隠してるな？』

【そ、そんなことはない、ぞ？】

俺の質問に、大神はどもりながら答えた。最後疑問形。

……… なんだか、最初の頃に比べて随分俗に染まった気がするな。

『まあ、悪いことじゃないんなら、大神を信じる。』

【そ、そうか…】

大神は、そう言ったきり黙り込んでしまった。

まあ、いいか。

俺は取り敢えず調子は悪くないようなので、問題点を無視して座禅を続けることにした。

1・角とブレードを大きくしてみよう！

体の中を流れるエネルギー的な何かを感じ取り、角とブレードに流す。

そうすれば、角は凡そ30cm程に、ブレードは肘から先30cm位にまで伸びる。

ちなみに、このエネルギー（妖力とする）を感じ取れるようになる

まで、1年かかった。

2・切れ味を変化させよう！

そのまま、細部に流す妖力の量を変化させ、切れ味を落とす。

そうすれば角を出したパワー、スピードのまま相手を殺さずに無力化することも楽になる。

此処までの作業、凡そ1分。

まだ実戦では使えない。

暗殺などではブレードを使うものの、やはりまだ殺しには慣れない。というか慣れたら駄目だろう。

今までの2行程を何度か反復し、時間を短縮させる。

とはいっても、中々順調には行かないのが現状だ。

【まあ普通に考えて、鬼の力で殴られれば死ぬがな。】

……それをしないように手加減もするさ。

【鬼の力を出さずにやればいいだろう。】

『あつちは回避特化だろ。忍術くらいしかないじゃないか。』

疑問を含んだ大神の声に、俺は答える。

『殺したくないけど鬼のスピードとパワーが必要な時のためだ。』

【……そうか】

空白の後の大神の言葉は、俺を咎めているようでもあった。

まだまだ甘い、か。

さて。

そろそろ時間だ。

俺はさつさと荷物を纏め、学園長室へと向かった。

山を降りる途中、元気を取り戻したさつきの熊を見かけたが、こちらは木の上だったのであちらは気付いていないようだった。

寝起きで機嫌が悪かったとはいえ、悪いことをしたかな。

なんて思うのは。

やっぱり俺が甘いからなのかもしれない。

山を降りてからは屋根の上を伝って行ってもよかったのだが…まだ時間があつたので、ゆっくり歩いて向かうことにした。

ちなみに、護衛対象とはそこまで離れていない。

何かあればすぐに駆けつけられる距離だ。

発信機兼監視カメラ『アンダーライン滞空回線』（もろパクリ）を使って監視しているので、問題ない。

昨日ぶつかった時に付けておいたのだ。

【完全に犯罪だ。】

うっさい。

バレなければいい。

『滞空回線』はかなり小さく、それでいて金属反応も起こさない為、発見するのはほぼ不可能といえる。

3つも4つも下の少女に欲情することはない。

俺は年上が好みなのだ。

【…お主、年上好きなのか？】

『ああ、言ってなかったか。というか心を読むな。』

【なに。もう慣れた。】

『慣れられても困るんですけど!?!』

俺はくわっ、と目を見開いた。

周囲の生徒達が驚いたように離れていく。

恥ずかしいです。

俺は大きく溜め息を吐いて、学園長室に入った。

其処には既に先客がいて、学園長と話をしている。

オレンジ色の髪をツインテールにして、鈴をつけたオッドアイ（！）の少女。

護衛対象。

所在なさに立つ赤毛の10歳くらいの少年。

タカミチ。

あ、そういや、昨日の報告書に今日新任教師が来ること書くの忘れてた。

……まあ、いいや。

提出は週末だし。

若干の現実逃避をしつつ、学園長を見る。

ツインテール娘（以下ツイ子）はまだこっちに気付かないらしく、憤慨している。

護衛対象はこっちをみて、「あ、昨日の人や」と手を振っていた。振り返した。

タカミチはこっちを見てぺこりと頭を下げてからツイ子を見て、とんとんと肩を叩く。

「た、高畑先生ッ！？いらっしやったんですか？」

どれだけ周りが目に入っていなかったんだツイ子…

「……誰？」

今度は俺を見て首を傾げている。

「彼は鬼原禪くん。そこにいるネギ君の補佐として来て貰った先生じゃ。」

学園長の説明で、少年がバツと顔を上げる。

こちらと目が合うと、少年は自己紹介を始めた。

「はじめまして！ネギ・スプリングフィールドといいます！麻帆良にはまほ…えっと、英語を教えるに来ました！」

うん。大事なことが分かってないよネギ少年。

魔法について口走りそうになったよね今。

バレたらアレだからね。オコジヨ。

おっちゃんとかだったら構わないけど、流石に小さい子供はなんとなく嫌だ。

【鬼原禪。お主も自己紹介せんか。】

「あ、そうだった。俺は鬼原禪。教師としてはまだ半人前。」

というか、免許すら持つてはいないけれど。
自分で言っていて笑いそうになりながら、自己紹介を続ける。

「まさかこんな子供が先生をやるとは思わなかったが…まあ、精一杯補佐させていただく。以後お見知り置きを。」

こう言ってから一礼。

そして学園長に目配せし、続きを促す。

「それじゃあ、ネギ君はアスナちゃん達のところ泊める、ということで大丈夫かの？」

「はあ…しかたない。なにかあつたらすぐに追い出しますからね！」
なんだかんだ言っていていい奴だな、ツイ子。

「ではの、授業も近いから、このかとアスナちゃんは教室へ行って
いてくれ。」

学園長の言葉に従った二人が部屋を出て、この場には魔法関係者しか存在しなくなった。

「昨日は言いそびれたが、鬼原君。ネギ君をよろしく頼むぞい。」

「了解しました。仕事ですしね。」

【それは余計だろう。】

横から大神が口を挟んでくるが、この際無視。

「ネギ君。鬼原君は魔法関係者じゃから、なにかあったら気軽に聞いていいのじゃぞ?」

それをあんたが言うのはどうなのか、と疑問に思ったが口には出さない。

ネギ少年は学園長の言葉を聞いて安心したような笑みを浮かべると、「はいっ!」と大きく頷いた。

そこで、部屋にノックの音が響く。

「しずなです、学園長。入りますよ。」

「どうぞ。」

入ってきたのは妙齢の女性。ネギ少年がその豊かな胸に顔面を押しつけている。羨ま…もとい不埒な。

【色魔め。】

大神も怒っている。

【お主にだ。】

何故!?

「それじゃあ鬼原君、ネギ君を頼むよ。」

ずっと黙っていたタカミチがそう言つと、胸からネギ少年を引っ張り出した源先生が教室へ案内する、と言つた。

源先生、ネギ少年、俺、と続いて部屋を出る。

これから、ネギ少年の初授業だ。

《次回へ》

図書館島編 邂逅 壱（後書き）

次回予告

初めての授業に燃えるネギ少年。

一方で、失った記憶のかけらを集める禪だが、記憶のかけらだと思
ったものはただの貝殻だった。

果たして貝塚は発見できるのか！

そして久しぶりに天界に戻った大神だったが、同僚の神がネットゲの
パーティーメンバーだと知って・・・？

次回「海とネットゲと初授業っ（大嘘）」

そうそうそうそう、票が集まらない。

そしてヒロイン誰にするかもアンケートとります！

じゃかじゃか入れてってください！

図書館島編 邂逅 式（前書き）

鏝「未だに読者からまったく質問が来ない質問コーナー！」

禪「というか読者から質問募集してたの？」

大【作者が忘れていたからな。】

鏝「・・・今日の質問！」

禪「流したな。」

大【だな。】

鏝「『後頭部とタバコ臭』さんから。二人組みですね。『出番が少ないです。何とかしてください。』」

禪「もう現実逃避か。あとあんたらは真の方で出番多いからいいだろ。」

大【こういったssでは基本的に出番が少ないんだ。観念しろ。】

鏝「というわけで質問募集します！決してネタ切れではないので、あしからず！」

図書館島編 邂逅 式

3人で暫く歩くと、お目当ての教室の前へ着いた。

「じゃあ後は鬼原先生、任せていいですか？」

源先生の言葉に少しどきまぎしつとも頷く。そのままぺこりと頭を下げて去っていく源先生をぼけつと見ていると、

【おい、鬼原禪。早くしろ。子供が困っている。】

『ん、ああ、すまん。』

目の前にどストレートで好みのタイプが現れれば仕方がないとは思うものの、ネギ少年を困らせるのも悪い。

やはり若干声が低い大神の声に促され、ネギ少年に後からついて来るように言ってから扉を開ける。

落ちてきた黒板消しをキャッチし、そのまま投擲。9割の罫を破壊。唯一残した3本のうち2本の吸盤矢を左手でキャッチし、首謀者らしき2人に軽く投げる。勿論強さは違う。

「くぴやつ」と奇声を発した首謀者2人。

残りの一本はネギ少年に向かい、展開したままだった障壁に阻まれて止まった。

阿呆…

俺は思わず頭を抱えそうになった。避けると思って放置したのだが。

すぐに障壁を消したものの、勘のよさそうなツイ子（名簿を確認したところ、神楽坂明日奈というらしい）は怪しんでいるようだ。

気を取り直してネギ少年から自己紹介をする。

「ネギ・スプリングフィールドです！ここにはまほ…英語を教えに来ました！」

「鬼原禪だ。ネギ少年の補佐として来た。」

俺達2人を交互に見て目を白黒させている生徒達。一部魔法関係者らしき生徒は何やら身構えているが。

大方急に担任と副担任が変わったから、驚いているのだろう。この後、俺達は生徒達に囲まれて騒がれるわけだが、恥ずかしいために割愛させていただく。

そして質問の時間。

今俺は、朝倉和美といういかにもな記者生徒に質問されている。ちなみにネギ少年はもう終わった。質問の時間の前に手合わせを申し込んできた奴がいたが、一蹴。

「名前はもう聞いたから…生年月日と血液型は？」

そんなことを聞いてどうするのだろうか、と思いながらも律儀に返答。

「1984年8月31日。血液型はA。」

「趣味特技は？」

「…特にない。考え事とか。」

「じゃあ最後に一つ。このクラスで気になる人は？」

この質問は予想外だった。

しかし俺は表情には出さず、飄然と肩をすくめてみせる。

「いないさ。俺は年下は趣味じゃないんだ。」

朝倉は一瞬ムツとした表情を見せたが、すぐに気を取り直し、礼を言って下がった。

こうして漸く授業が始められた訳だが、どうやら神楽坂がさっきの障壁の件を覚えていたようで、消しゴムを文字通り、『ちぎっては投げ、ちぎっては投げ』。

【おい、禪。筆箱を投げそうになっているぞ。】

慌てて神楽坂を見てみたが、すぐに視線を外す。

『ああ、あの子…確か雪広だったか。が止めてくれるみたいだ。』

いや、というか。

『お前今、俺のこと「禪」って呼んだよな？』

【…あ。】

うつかりかよ。しかし、何故にフルネームで呼んでたんだろうな。

【…………色々とある。私とて…………あ。】

今度は一人称。

一回ボロが出ればあとはどんどん連鎖的に。

『別に慣れてるのでいいのによ。』

【…………分かった。】

しかし、8年同じ口調でそっちに変わらなかったのか？

【私が何年生きていると思っている。】

『…………心読むなつてば。』

閑話休題

順調に授業も進んでいく中で、神楽坂がやはりというかなんというか、勉強が苦手であることが判明した。

すらすらと解説するネギ少年と黒板を見て、首を傾げている。頭の上にははてなマーク。

というか、このクラスはおかしいだろう。

わかっていない奴と、余裕綽々な奴の両極端だ。

一部、まあ普通に受けてはいるものの…

「じゃあ、この問題を、えーっと……じゃあ、アスナさん解いてください。」

俺が黙考していると、ネギ少年の声が聞こえてくる。

補佐の仕事なのになにもやらないというのはマズかるう、と思いつつ、俺はネギ少年と神楽坂に目をやる。

神楽坂はやはりわからないようでしどろもどろ。

「アスナさん、英語駄目なんですねえ。」

俺は寄りかかっていた扉の横を離れると、ネギ少年に近寄って肩を叩き、振り返ったところでこピンを入れる。

「あつっ！」と額を抑えて涙目になるネギ少年。

「その言い方はないだろ。」

俺が言うと、びっくりしていた生徒達は大体分かったようで、なんとなく気まずそうな顔をしていた。

「神楽坂だつて一生懸命考えたんだ。……だよな？」

俺が目をやると、彼女はコクリと頷いた。

「それなのに『駄目』はいただけない。」

俺がここまでいうと、ネギ少年は漸く合点が言ったようだ。

「まだ日本語は不慣れかもしれんが…気を付けろ。」

「ハイ！教えてくれてありがとうございます！アスナさんもごめんなさい！」

……悪い子、ではないみたいなんだがな。

俺は小さく息を吐き出し、仲直りをしている2人を見て再び扉の横に寄りかかった。

その後は大した問題も発生せず、授業は順調に進んだ。

昼休みが始まる。4限の担当はネギ少年ではなかったため、俺は職員室を出て2―Aへと向かった。

扉から顔だけ覗かせる。

「桜咲さん、いるか？」

彼女は直ぐにこちらを見ると、かなり警戒した顔つきで歩いてきた。

「なんですか？」

「ちょっと屋上まで来られるか？」

俺の頼みに、桜咲さんはさらに警戒を強めつつも頷いた。

「で、何の用ですか？」

場所は変わり、屋上。

情眠を貪るエヴァンジェリンさんとその横にいる絡繰さんの対角の位置に来ていた。

桜咲さんの質問に、俺は確認の意も含めて呟いた。

「……………近衛木乃香」

途端に警戒レベルが限界にまで上昇。下げている竹刀袋を腰だめに構え、袋の口は緩められ、彼女の口は引き結ばれ。

「…貴様」

「おいおい、確認だ、確認。俺は新しく付く護衛。桜咲さんの補佐をやらせてもらう。」

しかし未だに彼女の警戒は弱められない。

選択を誤ったか…。

「何が目的だ？」

後悔する俺に問いかけてくる桜咲さん。

俺は事実をありのままに伝えることにした。

「仕事だ、仕事。関西魔術協会…だったかから頼まれたんだよ。」
近衛木乃香を護衛しろ』ってな。」

俺が返答すると、桜咲さんは「長が…？」と呟き、漸く警戒を解いた。

完全にはないものの。

「……貴方が他の者に買収される可能性は？」

「ゼロだ。」

間髪入れずに言い切る。

こちらとしてもプライドがある。

……大神も五月蠅いしな。

【ふん。禪だけでもそんなことはしないだろう。照れ隠しに私を使うな。】

『うつせ。心読むな。』

俺達の会話（？）は、桜咲さんの言葉で中断された。

「一応は、分かりました。ただし、口約束では信じられませんから、私はいつでも貴方を警戒します。ゆめゆめ忘れないように。」

取り敢えずの顔合わせはこれでいいとしよう。

俺は何時の間にか絡繰さんと会話していたエヴァンジェリンさんを見て、これは次の授業サボるかな、と考えながら屋上を後にした。
一瞬目を開けた彼女の目には、明らかな警戒が浮かんでいたのを記憶に留めながら。

午後はさつき職員室にいるときに学園長から頼まれた『広域指導員』の仕事。勿論報酬は追加だ。

タカミチには授業が終わる頃に学校に戻るように言われた。

何故なのか首を傾げながら、俺は麻帆良内を散策していた。

何とはなしに路地を覗き込めば、煙草を吸う高校の制服姿の男達がいる。人数は6人。

「高校生が煙草吸っちゃあ駄目だぞ？」

俺が声をかけると、彼らは此方を一瞥してから鼻で笑った。

「広域指導員とはいっても、デスメガネがいねえなら怖かねえよ。」

「だよなー。」

こめかみがひきつりそうになったが、それでも自制して、辛抱強く言い続ける。

「しつけない！」

5分程しつこく言うと、ついにキレた男達。1人が立ち上がると、

残りも一斉に立ち上がった。

俺は溜め息を吐くと、飛びかかってきたうちの1人にリアットをかまし、そのまま仰向けに倒れかけたそいつを盾にして数人の拳を防ぐ。

同時に殴られ失神したそいつを脇にぺいつ、と捨てやり、さらに激昂する彼らに右腕に2人、左腕に2人の4人同時リアット。後頭部を打ち付けないようにして地面へ投げ捨てる。

それでも戦意を失わない最後の1人にはほぼ無助走でのシャイニンググウィザードを叩き込む。

殲滅が終わると、俺は手をぱんぱん、と払って失神した彼らの財布を取った。

中を開けて確認し、

「ちっ、シケてんな」

なんてことは言わずに学生証を引っ張り出す。

俺は全員を抱えると、記されている学校へと引き摺っていった。

図書館島編 邂逅 貳（後書き）

次回予告

ついに記憶を取り戻した禪！しかし彼には、およそ記憶と呼べるものが存在しなかった！実は生まれたてだった禪の目的とは！？

一方の大神は天照に神様定期テストの結果で勝ったことを大いに自慢していた。

ついに堪忍袋の緒が切れた天照が行ったくすぐりの必殺技とは！？

次回「目的とくすぐり（大嘘）」

すみません。今回はいつもによりをかけてひどい次回予告でした。

感想ください！お願いします！これがないと続きが書けないんです・

図書館島編 邂逅 参(前書き)

禪「相変わらず質問来ない質問コーナー。」

鑛「すでに雑談の場に……」

大【今回は……部下の方々から……え？】

鏝「なにになに・・・」
「大神様の分身が怠けすぎです！なんとかして
ください！」だって。
「」

禪「ついに本編でまったく登場してない奴からだな。」

鋤
┐
•
•
•
└

大「この件に関しては私がなんとかしておこう。というか、これは質問じゃなくて要望だろう。」

鋸「むう……ネタが尽きたから仕方ないのだ！」

禪「完全に開き直つたな……というかこのコーナー読み飛ばされてるんじゃないか？」

鏟「私が必死に目をそむけてたことに触れないでください！」

大「まあ、そんなわけで、このコーナーと最後の次回予告は、要望がない限り一時閉鎖だ。」

鏟「ちよ、勝手に決めないでえええええええ！」

禪「どうせ大して人気があるわけでもないし、べつにいいだろ。」

鏝「うつ・・・じゃあ今回もどうぞ・・・」

図書館島編 邂逅 参

「あ、ありがとうございました。ほら、お前たちも着いてこい。」

これで4校目。

この数は、今日しょっぱいた不良グループの数でもある。

しかし、そろそろ授業時間も終わる。

放課後には学校に戻って置いてほしい、とタカミチにも言われたこともあり、広域指導員の仕事はこれにて終了とすることにした。

幸いにも、ここから学校まではそう距離はない。

俺は大神と益体のない会話(?)をしながら、人通りの少ない昼間の道を歩く。

レンガ敷きの地面で、俺の革靴がコツコツと音を立てていた。

『そういえばさ。』

【なんだ？】

『俺って、どうしてもモテないのかな？どうせなら書き換える時にもう少しイケメンにしてくれても良かったんじゃないか？』

【……………】

俺がふと思ったことを伝えたと、大神は黙り込んだ。

僅かな不満と、多量の呆れが感じられる黙り方だった。

？

俺は何故大神が黙っているかが分からず、首を傾げそうになるのをなんとか堪えた。

『なあ』

【……今ので十分だろう。】

大きな溜め息を吐きながらの大神の言葉には、やっぱり、何か不満そうな響きが聞こえた。

【もうすぐ学校だ。一人で百面相をしていたら完全に不審者だぞ。】

無理矢理打ち切るように言われ、俺は釈然としないながらも大神への言葉の送信をやめた。

2時間ぶりに戻った職員室。

俺はちゃっかりと葛葉先生とせずな先生で目の保養をしてから、コーヒーを煎れる。

再び大神に問いかける。

『なあ、さっきの話。』

【そんなことよりも。】

強引に話を変えられた。

【朝、お前のテントの前に、何か書類のようなものがあつたぞ？】

気付かなかったが、まあ戻ってから確認すればいいだろう。

大神とも会話をやめて、ブルーマウンテンの芳醇な香りを楽しんで（インスタントです）いると、終業のチャイムが聞こえてくる。

タカミチもそろそろ帰ってくるだろう。だが、1分ほどして、職員室に入ってきたのはタカミチではなかった。

「近衛さんか。何か用？」

思いつ切り護衛対象。『滞空回線』からは異常は見られなかったが、そういやあ、さっきなんか話してたな。『かん…かい』がどうだとか。これ、音声入りにくいんだよなあ…映像だけでいいかもな、とか考えて作ったから。

「ちよーつと教室まで来てくれへん？」

特に問題があつたわけではないようだ。教室で何か頼み事か？

俺は取り敢えず、素直に後に着いていくことにした。

教室の前まで来ると、ちょうど反対側からネギ少年と神楽坂さんがやって来る。

「じゃ、扉開けて。」

神楽坂さんに言われ、ネギ少年が扉を開ける。

「……ようこそ！ネギ先生！鬼原先生！」

破裂音と共に飛んでくる歓声を聞いて、俺達は2人そろって目を丸くした。

まさか歓迎会と来たか。

正直予想外だったが、なんとか表情を崩さずに教室の中へ入った。

置いてある菓子をばくつきながら、浴びせられる質問に返答する。

「出身は？」

「もぐもぐ……長野の方の田舎だ。」

「彼女は？」

「……いない。」

「好きなタイプは？」

「もぐもぐ……包容力のある人……だな。」

「しずな先生とか？」

「まあ、そんなところだ。」

「ほう！」

こいつは良いことを聞いた！と叫びながら去っていく近くにいたG
… もとい、早乙女さん。

俺は引き留めるのも面倒になり、再び続けられる質問へと答えて行った。

三十分程で粗方の質問も終わり、俺は一息ついて辺りを見渡した。

ふと、ネギ少年と神楽坂さんが連れ立って教室を抜け出していくのが見えた。

俺は桜咲さんがしっかりと近衛さんを見ているのを確認してから、ゆっくりとその後をつける。

【出歯亀か。】

この際、大神は無視する。

階段の踊場に出て、二人は立ち止まった。

何やらごちゃごちゃと話しているのだが、ここからでは聞こえない。

俺はなんとか途切れ途切れの声を拾い上げ、何を話しているのか聞き取ろうとした。

「……………ですから……………ミチにこく……………めの……………習を……………」

「……ったよ……くま……習……」

「……………い!」

「……つと、……先生……好きです!」

ゑ?

これはもしかして、聞いちゃ行けないこと聞いちゃった?

俺はかなり後悔しながらその場を離れようとする…のだが。

後ろからやって来た生徒達に押されて、生徒達と一緒に二人の目の前に来てしまった。

「主役が2人とも抜け出すなんて駄目よー!」

誰かの言葉に全員がうんうん、と頷き、俺達はそのまま教室へと連行された。

当面、俺は二人の会話の内容を秘匿することにした。

別に広めてもいいことないしな。

…しかし、だ。

『なあ、大神。』

【間違いないな。】

『なんでここに甲賀もんがいる？』

【その料理はあの生徒が作っているぞ！】

……残念な以心伝心だった。

俺は眉間を抑えながら、料理の追加を運んでくる生徒——たしか五月とかいったか——について語る大神を無視して思考を始める。

ここに甲賀の忍がいる、というのは小競り合いの原因となる。

幸い、俺は今忍装束を来ていないため、あちらは俺が伊賀の忍だとは気付いていない。

だが、何時までも隠し通せるはずもない。

案としては。

？何とか隠し通す

？俺の女にする

？こつちから仕掛けて無力化

？見送る

？その他

……まず、？は無理だと分かっている。

？は論外。？に関しては意味すら分からないため、必然的に残るのは？と？。

先にこっちが卑怯にならないように決闘やらなにやらを持ちかけて叩き、戦意を喪失さそうか、あるいは問題を先送りにして、気付かれたときに何とかするか。

……前者、小物臭いな。

未だに料理に関して語る大神の言葉を遮って確認すると、大神も後者でいい、と返事を返してきた。

つつか、お前なんで物食べられないのに料理について語れるんだよ。

【お主の身体と味覚をリンクさせた。】

ドヤツ、と聞こえてきそうな声で言う大神に、俺は一つだけ言いたいことがあった。

『……だから心読むなつて。』

兎にも角にも、無事に歓迎会は終了した。

片付けは自分達でやる、という生徒達に押し切られ、俺は一足先に

家路に就いていた。

ネギ少年は、現在神楽坂さんと近衛さんの部屋に泊まるため、教室の外で待っている。

片付けには参加させて貰えなかったらしい。

俺は地面の上に置いたシートに乗せてある書類を手にとり、まだしばらく変わりそうにない寢床である山中のテントに入る。麻帆良での任務の追加説明書で、麻帆良の環境について追記されていた。

その後、夕食のため、保存してある食い物の調理を始めることにする。

魚と山菜ならば山で手にはいるのだが、肉に関しては下で買ってくるしかない。

日持ちもし辛いので、買って一日程で食べきらなければいけないのだ。

と、いうわけで今日は、簡単サバイバル生姜焼きを作ろうと思う。

フライパンとカセットコンロを準備し、いざ肉を投入………する前に、俺のテントに近付いてくるモノがある。大きさと形状だけが分かる簡易滞空回線だ。

『本能』だけでは辛いときのために山の周囲を監視している。

………無機物？

自律兵器の可能性も考慮して、俺はテントに戻り、袖に幾つかの暗器を仕込んだ。勿論力セットコンロの火は消した。

【……あんなものを使わずとも、私がいるだろう。】

確かに、大神の探知能力はかなり高い……のだが。

『だってお前、たまに寝るじゃん。』

重要な所で睡眠しやがるのだ。こいつは。

神様って眠る必要があるのか？

【あたり前だろう。私だって生物だ。】

そうなの！？

初耳である。

さて、話しているうちに、近寄ってきているモノはテントの目の前まで来た。

無機物のため、敵意の有無は分からない。

俺は入り口の真横に止まり、いつでも暗器を取り出せるようにして構えた。

「先生、いらっしやいますか？」

拍子抜けした。

一応警戒は解かずに入り口を開き、確認すれば。

「……………絡繰さんか。」

クラスの生徒だった。

まさかロボットが居たとはね…

俺は確認を怠ったことを反省しつつ、応対することにした。

「何か用か？」

「マスターが呼びです。」

「マスター、というと、昼休みに一緒にいたエヴァンジェリンさんか？」

はい、と無表情で頷く絡繰さんに少し待ってもらい、俺は保存用のクーラーボックスに肉を仕舞って、再び入り口まで戻る。

しかし、従者とマスターの関係とは、また変わった関係だな。

作り主、なのかね？

「さて、と。大体どんな用事が分かるか？」

「いえ、マスターからはただ『連れてこい』と言われただけですの
で。」

そりゃまた随分と横暴なマスターなことで。

俺は断って絡繰さんに何かあっても困るので、エヴァンジェリンさんの家まで着いていくことにした。

道中は足場が悪く、道のりも覚えにくい。

俺は周囲の木の形を覚えながら、絡繰さんの後ろへと続いた。

エヴァンジェリン邸は、小洒落たログハウス。

絡繰さんが先に中へ入り、俺も続く。

【へえ…】

大神がいつの間にか、より俗っぽい声を上げる。素が出過ぎだ。

兎も角、中はファンシーなぬいぐるみや人形が多かった。

中央にはふんぞり返るエヴァンジェリンさん。

「よく来たな。鬼原禪。」

「何の用だ？」

横暴な人間、という先入観のある俺の返事は、素っ気ないものとなつてしまった。

しかし、エヴァンジェリンさんは気を悪くした風もなく、続ける。

「今日は聞きたいことがあったから来て貰った。」

ふむ、と俺は顎を引く。

「お前は魔法関係者、で間違いないな？」

首肯。

「ならば聞くぞ、鬼原禪。お前は、なんだ？」

聞かれた意味が分からなかった、と言えば嘘になる。

俺は間違いなく人外だ。

だが、それを一目で見破れる筈がない。

「お前からは、何か昔嗅いだような、何か凶悪な思い出に関わる雰囲気を感じる。」

何故分かったのか、俺が不思議がることを察したようで、理由をいうエヴァンジェリンさん。

『俺以外にも蒼鬼っていたのか？』

【今はいないぞ。確かここには……2000年程前になるな。】

俺の確認に、大神は答える。

…？

俺は、一応、聞いておくことにした。

「じゃあ、お前は、なんなんだ？」

エヴァンジェリンさんは、俺の問いかけにピクリと眉を動かして、答えた。

「ふん。質問を質問で返すのは如何かと思うがな。答えてやろう。」

「私は600年を生きる吸血鬼。」

「エヴァンジェリン・A・K・マグダウェルだ！」

でーん、と胸を張っている自称吸血鬼。

【本当のことだぞ。】

まじかよ！？

俺は驚愕し——もともと、顔面筋は動かさないが——エヴァンジェリンさんを見た。

「なんだ。私のことを知らないのか？」

「知らん。」

俺の否定に、エヴァンジェリンさんはかなり驚いたようだった。

恐らくは魔法関係者にとって、エヴァンジェリンさんはかなりの有名な人だったらしいが、俺が魔法と関わったのはつい数日前。

当然そのようなことはまったく――

「あ。」

そういえば、任務の追加説明書にそんなことが書いてあったような。

「詳しいことは知らんが、名前くらいなら知っている。」

訂正すると、エヴァンジェリンさんは何やら安心したような顔になった。

「さて、私がいかに大物かは分かっただろう。次はお前がなんなのか話せ。」

当然ながら、俺は答えようとしたのだが、

【今はやめておけ。】

大神に止められてしまった。

好き勝手してはいるが、俺は大神に生かさせてもらっている身だ。こいつの意見は尊重しなければならない。

「……断る。」

ぶちり、とエヴァンジェリンさんの額に青筋が浮いた。

「ほつ……？最強の魔法使いたる私の言葉を見殺しする、と？」

俺は敢えて口の端を吊り上げ、寧猛に笑って見せた。

「そつだ。」

青筋が音を立てる。プライドの高い彼女を知らない、と言った上にこれだ。仕方のない反応ではある。

「…喧嘩でも、売っているのか？」

いつの間にか煎れていた紅茶を出してくれた絡繰さんに目配せをして、エヴァンジェリンさんは懷に手を伸ばす。

「ふん。そんなつもりはないな。」

やはり、敢えて挑発的に。

「叩き潰してやろうか…！」

「遠慮しておこう。」

俺は後ろに足を蹴り上げて扉を開き、バックステップで外にでる。

「逃げるつもりか！」

追ってくる声に、

「戦う必要はないだろう！」

返事をしてから、俺は縮地を使った。

テントに入って、クーラーボックスを確認すれば、

「……………ツいてねえ…」

すでに氷は溶け、肉は傷みかけていた。

図書館島編 邂逅 参（後書き）

次回予告（たぶん最後の）

生まれたばかりにしては体が大きすぎる禪。その正体は、なんとジヤ。アンの親戚だった！？

一方で現世に降り立った大神が目にしたものとは！？
そして、ついに姿を現した謎の男『タ・カミーチ・タカーハタ』の
ダンディズムの秘訣は！？

物語はついに終結を向かえ・・・ないッ！

次回「禪とジヤイアン（大嘘）」

結局、次回以降前書きと後書きのこのコーナーはやめにします！
感想まっけます！バンバン送ってください！

詳しいアドバイスなどあれば、聞かせてください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6307x/>

ネギま！に入った人・改

2011年11月17日01時11分発行